

4-KP-14-2 部分免荷トレッドミルトレーニング前後の免荷量減少に影響する要因

¹関西リハビリテーション病院リハビリテーション部, ²リハビリテーション科学総合研究所

若竹 雄治¹, 鋤田 幸輔¹, 西下 智^{1,2}, 松本 憲二¹, 坂本知三郎¹, 吉田 直樹^{1,2}

【はじめに】部分免荷トレッドミルトレーニング（以下、BWSTT）では、免荷量を適切な値に設定して利用する必要がある。しかし、実際のBWSTT前後でこの値が半減したという結果を、我々は前回の本学会で発表した。その要因として装置の構造等が挙げられるが、今回は各対象者の免荷量減少に個人の特性が影響しているかどうかを確かめた。【対象と方法】BWSTT前後の免荷量変化の記録がある12名のデータを後方視的に解析した。トレッドミル（ミナト医科学、オートランナー、AR200）と免荷装置（酒井医療、アンウェイシステム、BDX-UWSZ）を使用したBWSTTは5分を行った。個人特性として、体重、身長、トレッドミル速度（以下、TM速度）、歩行自立度評価のFunctional Ambulation Category（以下、FAC）、発症後のトレッドミル経験（以下、経験。有を0、無を1とした）を用いた。これらを説明変数とし、BWSTT前後の免荷量の比（以下、免荷量減少比）を目的変数とした重回帰分析を行った。【結果】対象者の免荷量減少比は 0.4 ± 0.2 であった。重回帰分析の決定係数は0.76（自由度調整済み決定係数は0.57）となった。各特性の平均 \pm SD、標準偏回帰係数は、体重: 59.1 ± 12.3 kg, 0.10, 身長: 159.6 ± 8.1 cm, 0.31, TM速度: 2.0 ± 1.1 km/h, -0.17, FAC: 3.6 ± 1.3 , 0.26, 経験: 0.3 ± 0.5 , -0.60となった。【結論】BWSTT前後の免荷量減少には、個人の要因の関与が示唆された。今回採用した特性の中では、標準偏回帰係数からは身長と経験の要因が比較的大きそうだと考えられるが、他の特性の採用、対象者数を増やしての検討が必要である。